

川端康成著「伊豆の踊子」新潮文庫、新潮社 1950年8月20日刊を読む

伊豆の踊子

1. 道がつづら折りになって、いよいよ天城峠に近づいたと思う頃、雨脚が杉の密林を白く染めながら、すさまじい早さで麓から私を追って来た。
2. 私は二十歳、高等学校の制帽をかぶり、紺飛白の着物に袴をはき、学年カバンを肩にかけていた。一人伊豆の旅に出てから四日目のことだった。修善寺温泉に一夜泊り、湯ヶ島温泉に二夜泊り、そして朴歯の高下駄で天城を登って来たのだった。重なり合った山々や原生林や深い溪谷の秋に見惚れながらも、私は一つの期待に胸をときめかして道を急いでいるのだった。そのうちに大粒の雨が私を打ち始めた。折れ曲がった急な坂道を駆け登った。ようやく峠の北口の茶屋に辿りついてほっとすると同時に、私はその入口で立ちすくんでしまった。余りに期待がみごとに的中したからである。そこで旅芸人の一行が休んでいたのだ。
3. 突っ立っている私を見た踊子が直ぐに自分の座蒲団を外して、裏返しに傍へ置いた。「ええ…」とだけ言って、私はその上に腰を下した。坂道を走った息切れと驚きとで、「ありがとう」という言葉が咽にひっかかって出なかったのだ。
4. 踊子と真近に向かい合ったので、私はあわてて袂から煙草を取り出した。踊子がまた連れの女の前の煙草盆を引き寄せて私に近くしてくれた。やっぱり私は黙っていた。
5. 踊子は十七くらいに見えた。私には分らない古風の不思議な形に大きく髪を結っていた。それが卵形の凛々しい顔を非常に小さく見せながらも、美しく調和していた。髪を豊かに誇張して描いた、稗史的な娘の絵姿のような感じだった。踊子の連れは四十代の女が一人、若い女が二人、ほかに長岡温泉の宿屋の印半纏を着た二十五六の男がいた。
6. 私はそれまでにこの踊子たちを二度見ているのだった。最初は私が湯ヶ島へ来る途中、修善寺へ行く彼女たちと湯川橋の近くで出会った。その時は若い女が三人だったが、踊子は太鼓を提げていた。私は振り返り振り返り眺めて、旅情が自分の身についたと思った。それから、湯ヶ島の二日目の夜、宿屋へ流して来た。踊子が玄関の板敷で踊るのを、私は梯子段の中途に腰を下して一心に見ていた。——あの日が修善寺で今夜が湯ヶ島なら、明日は天城を南に越えて湯ヶ野温泉へ行くのだろう。天城七里の山道できっと追いつけるだろう。そう空想して道を急いで来たのだったが、雨宿りの茶屋でぴったり落ち合ったものだから、私はどぎまぎしてしまったのだ。

7. 間もなく、茶店の婆^{ばあ}さんが私を別の部屋へ案内してくれた。平常用はないらしく戸障子がなかった。下を覗^{のぞ}くと美しい谷が目の届かない程深^{ほど}かった。私は肌^{はだ}に粟粒^{あわつぶ}を拵^{こしら}え、かちかちと齒を鳴らして身顛^{みぶる}いた。茶を入れに来た婆^{ばあ}さんに、寒いと言うと、「おや、旦那^{だんな}様お濡^ぬれになっているじゃございませんか。こちらで暫^{しばら}くおあたりなさいまし、さあ、お召物^{めしもの}をお乾^{かわ}かしなさいまし」と、手を取るよう^{さそ}にして、自分たちの居間へ誘^{さそ}ってくれた。

P.8 ~ 10

<コメント>

川端康成の名作「伊豆の踊子」の冒頭は、読む毎に情景が細かに目に浮かぶようになる。「道」「つづら折り」「天城峠」「雨脚」「杉」「密林」「白く染め」「すさまじい早さ」「麓」「私を追ってきた」。最初の一文ですら、一つ一つの情景が動きとなって目の前に現れてくる。優れた小説とは、一つ一つの語句が動きとなって読者の創造、否、想像の翼(つばさ)を広げるようだ。時々、川端康成の作品もじっくりと味わいたい。

— 2016年9月4日(日) 林 明夫記 —